

鹿児島県大学図書館協議会研修会記録

日時：平成 27 年 10 月 21 日（水） 13 時 30 分～16 時 35 分

場所：鹿児島大学附属図書館 5 階 ライブラリホール

講師：佐藤義則氏（東北学院大学文学部教授）

演題：「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスの今後の展望と機関リポジトリの未来」

参加者：26 名

講演内容 [資料参照](#)

質疑応答（主な内容）

・大学図書館職員は、オープンサイエンスに関してどのようなかかわりをもっていくべきか、イメージがあれば教えていただきたい

→オープンサイエンス、オープンデータについては人手が必要。アメリカの例では、資金を確保して人員を採用して取り組みつつある。研究者とミーティングをしながらニーズに応じたサービスをしている。どこ（どのようなシステム）に保存するかという点では、研究資金から有料で 1T（テラバイト）のスペースを貸し出すなどしている。100T 規模でコンピューターセンタ等で運営しているところもある。

説明も含めメタデータの定義があいまいのまま、従来の業務にプラスして資金（人）もつかずに対応するというのは難しいだろう。ただし該当する研究の専門知識がないまま研究者と話し合うことも難しい。すぐに何かをすることもないが、備えだけはしておいてはどうか。

・大学でオープンデータをどこで管理していくのか。図書館としてどこまでかかわるか。大学として検証のためにデータの保管をしている大学もある。どこまで図書館で対応すべきか。

→研究データ管理、リサーチアドミニストレータ、インスティテューショナルリサーチなどについて、サイテーション管理に絡む部分は、図書館の得意な分野である。すぐに予算をとれるものでもないが、いい機会としてとらえてはどうか。

・データキュレータの養成、研修をどうしていくべきか、

→論文とデータでは違いがある。データは一点一点個別のものであり、博物館、美術館における収蔵品の扱いに近い。このようにデータキュレーションは、図書館の今までの仕事とはある意味異なり、扱う技術も違っている。管理、保存の仕方も違っている。アメリカでは大学院のプログラムをお金をつけて整備している。図書館員がデータ管理できるようにする、大学院生にデータ管理を教えるという 2 つの実態がある。日本でも、筑波大学でプログラムをつくる動きがあるように聞いている。そのように図書館職員の研修プログラム、再教育が必要になってくるだろう。

以上